

## 「排除する社会規範」を超えたコミュニティづくり

浪岡 新太郎

共同研究メンバー

浪岡 新太郎（コーディネーター）

平山 恵

勝俣 誠

ギル トム

外部：マルケス カジマ（ブラジルセアラ州立大学公共政策大学院 准教授）

### 趣旨

近年、コミュニティへの関心が高まっている。しかしながら「コミュニティ」という言葉が意味するものは一義的ではなく、それほど明確ではない。国際社会のようなトランスナショナルな意味、国民国家のようなナショナルな意味、基礎自治体のようなローカルな意味、さらには家族のような親密圏のレベルにおいてまで、「コミュニティ」という言葉が使用される。さまざまに異なったスケールの人間集団を「コミュニティ」という言葉で定義し、政策を立ち上げていくことには、どのような意味があるのだろうか。

政府、国会、基礎自治体などが「コミュニティの再興」や「新しい公共性」、さらにはコミュニティ維持に必要とされる「ソーシャルキャピタル（社会関係資本）」といった用語を強調するとき、その背景には、従来の福祉国家における生活保障分野を中心とした財政的危機から、従来行政が担っていた分野を国民、市民、住民を「メンバー」とする互助組織によって代替させるという意図も存在する。そして互助組織の役割を強化するためにメンバーの集団への帰属意識を高めることが推奨されることが多い。

その場合、当該集団の機能は、行政がこれまで担っていた機能を代替することを目的とすることに還元されないだろうか。そして、「メンバー」の資格は行政に委託される機能を遂行するにあたって「適切な」人間に限定されないだろうか。帰属意識の強化は、誰が「適切な」メンバーであるかを判断する際の排除のための規範として機能しないだろうか。たとえば、自警団の組織化や、「適切な」外国人（正規滞在外国人）との交流を促す国際交流協会の重要性を訴える行政の主張は、野宿者や非正規滞在外国人をはじめ、適切ではない、帰属の不確かな人間への警戒、さらには排除の傾向を強めることにならないだろうか。

行政による「排除の（市民）社会規範」の成立が進んでいるのだろうか。もちろん、人種主義集団の存在に見られるように、「コミュニティ」の強調以前のさまざまないわゆる市民社会の諸集団が排除の傾向をもたなかったわけではない。しかしながら、行政から相対的に独立した領域とされていた市民社会は、これまで緩やかな形で帰属の「適切性」を行政とは無関係に判断し、

アジル（特に行政的判断と無関係に受け入れられる避難所）として機能してきたことも事実である。

本研究では、コミュニティ重視の政策による排除の（市民）社会規範の強化の射程を理解することを目的とする。そのために、市民社会におけるさまざまな互助組織集団に注目し、こうした集団が、行政のコミュニティ重視政策の中でどのように「メンバー」を決定し、帰属意識を変容させ、社会的な排除に寄与、もしくは対抗しているのかを明らかにする。

## 活動詳細

### 1. 4月24日（円卓形式での研究会：公開）都市における文化活動

於：明治学院大学横浜校舎8号館2階会議室

「横浜寿町におけるアート活動による社会運動」Kotobuki Creative Action をめぐって

報 告：浪岡 新太郎

コメント：アムシュ・アブデラフィド（リール第一大学教授：社会学）

討 論：勝俣 誠、平山 恵、アンベール・マルク（レンヌ第一大学教授：政治経済学）、ルバイユ・エレヌ（日仏会館研究員：政治社会学）、森 千香子（一橋大学大学院准教授：社会学）、園山大祐（大阪大学大学院准教授：教育学）

研究会はすべてフランス語で行われた。また、17人の大学院生、外部研究者を含む参加があったので、日本語による逐語通訳を浪岡、箱山さんが行った。この研究会は平山がサバティカルから帰国して初めての研究会であり、勝俣、平山、浪岡の3人が各自の研究成果をふまえて議論する場になった。

### 2. 6月21日 人類学的アプローチで出会う社会の周辺—横浜寿地区を中心に

於：明治学院大学横浜校舎821教室（公開）

報 告：金 知恩（キム ジウン）ミシガン大学大学院人類学研究科 ABD

コメンテーター：河本一満 横浜市役所都市整備局

浪岡、平山が参加。

寿町の簡易宿泊所で生活しながらフィールドワークを行っている金さんに、人類学的アプローチにおけるコミュニティ、排除の概念について報告をいただいた。彼女は修士までをソウル大学大学院で修了しており、米韓におけるアプローチの違いについても興味深い観点を示してくれた。

また、行政当局者として街づくりに関わっている河本さんから、コメントをいただいた上で、議論を行った。

### 3. 7月10日 ジェンダーと社会的排除

於：明治学院大学横浜校舎 821 教室（公開）

報 告：水野 阿修羅 NPO 釜ヶ崎

コメンテーター：ギル・トム

浪岡、勝俣、ギルが参加。

水野さんは、もともと寿町において日雇い労働者として働いており、組合活動にも積極的に関わっていた。この経験をいかしながら、移動先の釜ヶ崎においてもアジアフレンドという主として非正規滞在の外国人支援運動を組織していた。しかしながら、その活動の中で、まさに活動家自身の中にある男性優位主義の問題に気づかされることになり、現在は、ジェンダーを巡る問題について釜ヶ崎で活動している。ギルとは昔からの知り合いであり、寄せ場におけるジェンダーの問題についてコメントをもらった。

### 4. Kotobuki creative network 主催の韓国調査への参加

ソウル特別区 7月6日夜出発 7月9日昼帰国

参加者：金 知恩、河本一満、浪岡

寿町と同じようないわゆるかつての寄せ場を訪問し、こうした場で行われているさまざまな市民運動を視察した。また、こうした運動の中での芸術的活動を行っている団体を訪問し、類似点と相違点、活動条件の違いなどについて議論した。

## 出版・報告について

### ギル

#### ・つげ義春関係

‘Chiko,’ ‘A View of the Seaside,’ and ‘Mister Ben of the Igloo’: Visual and Verbal Narrative Technique in Three Classic Manga by Yoshiharu Tsuge *International Journal of Comic Art* vol. 14 No.2: 169-190

#### ・北アイルランド関係

「西ベルファストの平行線：確執の都市風景」(West Belfast: Feud written in an Urban Landscape) 『明治学院大学国際学部附属研究所年報』15巻 99～128頁

#### ・福島原発事故関係

「汚された土、潰された共同体：福島県相馬郡飯館村長泥地区における放射能の悲劇」『寄せ場』(日本寄せ場学会年報) 25巻 30～53頁

「放射能と周辺地域の知恵」『民博通信』(国立民族学博物館) 139巻 14～15頁

- ・研究発表：原発事故関係

‘This Spoiled Soil: The response to radiation in Nagadoro hamlet, Iitate village, Fukushima prefecture.’ オクスフォード大学シンポジウム *The Disasters of 11th March 2011 – One year on* 3月23日

‘Sacrificing the Villagers to Save the Village? The Personal Dilemma of a Mayor In Fukushima’ (全米人類学会のプレゼン、サンフランシスコ、11月18日)

- ・大衆新聞関係

‘Peeping Tom’s Virtual Over-the-shoulder Drunken Salaryman Late-night Tokyo Train Tabloid Experience’ (シンガポール国立大学シンポジウム、*Teaching Japanese Popular Culture*, 11月12日)

## 浪岡

- ・6月に国際平和研究所機関誌にフランス国立科学研究所主任研究員フランク・フレゴジのフランス語論文、「ヨーロッパにおけるイスラームの制度化を振り返って」を翻訳した。

- ・8月にフランス国立科学研究所／日仏会館機関誌 *Ebisu* に査読付きで福島農家の損害賠償過程をめぐる社会運動についての論文をフランス語で発表した。

<<Politiques de dédommagement pour les agriculteurs à Fukushima?>> in *Ebisu*, CNRS/MFJ. 2012.

- ・寿町における外国人支援のあり方について、フランスの移民研究雑誌（国立移民史博物館）*Hommes et Migrations* へ8月に論文（フランス語）を投稿した。査読後、掲載可となったので、6月に刊行される。

<<Un essai pour la solidarité transnationale: le cas d’une association de quartier Kotobuki qui soutient des étrangers en situation irrégulière>>

- ・2013年6月13日に横浜市・フランスリヨン市・在日フランス大使館が主催する「芸術と社会運動」というシンポジウムで報告を依頼されている。

## 平山

- ・昨年度のサバティカルから戻ったばかりではあるが、シリアについての情報を収集し、スーダンでの調査を行っている。

- ・6月13日に国際学部附属研究所セミナーで「ルワンダの復興を再考する」で報告した。

- ・報告書最後に平山の2012年度におこなったシリアでの調査報告を添付する。

## 勝俣

- ・今年度より国際平和研究所の所長を務めており、活動をしている。今後、その成果をプロジェクトとの関連で出版することを予定している。

## 総括

今年度は初頭に勝俣、平山、浪岡が共同で国際円卓会議を行った。この会議は各人の研究の関心をお互いに明らかにすると同時に、外部の研究者との交流、協力可能性を探る機会となった。ギルは現在、寿町の研究よりも、東北地方の震災後の状況についての調査、執筆を続けているために参加できなかった。

各人がそれぞれフィールドをもちながら「排除」や「コミュニティ」といった概念をめぐる理論的側面で、それぞれのアプローチを批判し合えるような形での研究の遂行が今後も目指される。

ただし、福島に関してはメンバーが全員関心を持っており、この点で今年は共同の研究会を開催したい。また寿町については、浪岡とギルは関心を共有しており、浪岡の参与観察についてギルと相談の上、研究を進めたい。

## —調査報告—

### アンマン（ヨルダン）のホストコミュニティで生活するシリア人

平山 恵

2011年の3月から始まったシリア動乱により、140万人（国連2013年3月）ものシリア人が近隣諸国に逃げている。2012年度はヨルダンに避難したシリア難民、特に難民キャンプに入れなかったヨルダンの街で暮らすシリア難民の訪問調査および受け入れ側のヨルダン人への聞き取りから見えた「排除する社会規範」を超えたコミュニティづくりについて考察を行った。

#### 1. 現地調査から

ヨルダンにおいて、シリア難民は法的には働くことが許されていない。プライベートセクターにおいて非公式に働くことはできるものの、その仕事の多くは建設業、レストランやカフェ、街中の物売り等、肉体労働かつ低賃金である。聞き取りを行った家族の中の若い男性たちは、このような仕事についている者、或いは日雇い労働をしている者もいる一方、手に職を持ちながらもシリア人であるが為に働くチャンスのない男性たちもいる。

ターレク（仮名）はシェフの資格と経験を持ち、紛争以前はシリアやレバノンの一流レストランで仕事をしてきたが、ヨルダンのレストランで仕事を探しに行くと、シリア人だと分かった途端に渋い顔をされると言う。

シリア難民の学齢期の子どもたちも長引く動乱の中でヨルダンの学校に行きはじめている。小学5年生のジャミーラ（仮名）もその一人であるが、「最初はヨルダン人の友達ができた。しかし、このところ『シリア人多すぎ』と言われるので学校に行きにくい」と言う。

東アンマン地区はヨルダン人でも比較的貧しい人が住む地域である。そこにシリア人が家賃を払って生活している。ヨルダンのタクシードライバーのアフマドは仕事の合間をぬって次々に到

着するシリア難民の家庭を訪ねては彼らのニーズを訊ね NGO 等につなげて支援している。近隣の友人にも呼びかけて家庭訪問を手伝ってもらったり、リスト作りをお願いしたりして口コミで支援の輪はひろがっている。アフマドの親の世代がパレスチナ難民である。

11 月の聞き取りの際に、ヨルダンの宗教省から「過度にシリア難民を支援しないように」という通達が出た。アフマドの近所の人たちが集まって、どう対応するべきか話している。

2013 年 2 月に 2 度目の現地調査を行った。更に多くの難民の流入でホストコミュニティへの脅威となっているかと考えた。再度東アンマン地区の家庭訪問を行い、近隣のヨルダン人とも話をした。各店にシリア人が雇用されている。各店主のヨルダン人に聞き取りをおこなったところ異口同音に「雇用の必要はない。しかし、同じアラブ人として助けられないわけにはいかない」と言う。

モスクで出会ったヨルダン人が毎日訪ねてきてくれているというシリア難民の人も少なからずいた。ヨルダンで差別されながら生きていくのは苦痛だと 11 月に言っていたシリア人の主婦が、3 月には「声をかけられることにより、居心地がよくなってきた」と言う。

## 2. 考察

アラビア語とイスラームで結びつくアラブ社会。アラビア語は大きく 6 つの方言に分かれ、それもほぼ同じシリア方言を使うシリアとヨルダンである。方言によってほぼ同じ文化圏であるともいわれる。

国連難民弁務官事務所やヨルダン政府の方針はなるべくホストコミュニティであるヨルダンの人々に負担をかけないように学校などの公共機関には財政的支援をしている。また人口が増えたことによる生活資源へのアクセスの競争から対立が起これないように国際 NGO のスタッフを紹介させている。しかし国際 NGO の介入は追いついておらず、むしろヨルダンの有志が、生活圏で支援している。

ちょっとした手助けを受けて、そこに逃げてきた人々が「心地よい」と感じるコミュニティに暮らし始めたことが垣間見えた。

受け入れコミュニティのちょっとした手助けの動機がイスラームの教えによるものなのか、もともとパレスチナ難民が出自の人が多と言われるヨルダン社会の規範であるのか、引き続き、観察を行いたい。

シリア動乱開始から 2 年が経過して、トルコやレバノンといった他のホストコミュニティの経験も資料として蓄積されてきている。ヨルダンとの比較も試みたい。

※本報告書は、国際学部付属研究所共同研究『『排除する社会規範』を超えたコミュニティづくり』の中間報告書である。